

高野山に於ける圓光大師廟

前 田 聽 瑞

眞言密教の大道場高野山はまことに天下の靈場たるにふさはしい森嚴な名峰である。海拔三千尺の高嶺で、頂上には廣潤なる平地が横はり、姑射、摩尼、楊柳、轉軸なごの峰々が八葉蓮華に形ぎつてこれを圍む姿は、その儘諸佛の淨土たるにふさはしく、まことに信仰の大道場として申分のない靈地である。

嵯峨天皇の御宇、弘法大師がこの地を奏請してこゝに一大伽藍を創設して以來、星霜こゝに千百餘年、法燈は綿々として光輝いよいよあざやかに、國家擁護大衆利濟の靈場として、威名ますます赫々たる、弘法大師の弘誓實に尊し申さねばならぬ。

高野山の歴史は古りて茲に千百餘年、私はその歴史について多くを語るこゝが許されてゐない。たゞわが念佛の元祖法然上人(圓光大師)の御廟並にそれに關係をもつ事柄についてのみ考へてみるこゝにする。もこより精細な研究については後日を期したい。

私は大正のはじめ或る因縁で高野の山で六ヶ年といふ相當永い年月を送つた。年來高野山といふものに親しみの薄かつた私は、その際能ふ限りこの山の歴史を知つて置きたいと思つて、敢て特別の目的を抱かずに、たゞ漫然と寺めぐりをやつた。お寺の巡禮をやつてゐる間に感じたこゝは、所謂不斷念佛の道場が弘法大師の御膝元、眞言宗の本場である高野の山奥にあるといふこゝであつた。元來、淨土宗の畑で育つた私の注意は、さうしてもこの方面に集注せざるを得ない。従つて、私は學窓の餘暇よく新別所(今は靈嶽山圓通寺律藏院といふ)へ足を運んだものである。特別の目的を

持たない限り、わざわざ新別所へ出向く人はまつない云つてよい。

かの『法然上人行狀畫圖』によるに、こゝ、新別所は東大寺の念佛堂と相並べて不斷念佛の道場であつたといふことを書いてゐる。曰く、

「上人(法然)の勸化にしたがひて、念佛を信仰のあまり、かの故山上(こせんがみ)の醍醐に、無常臨時の念佛をすゝめて、末代の恒規とし、そのほか七箇所に、不斷念佛を興隆せられき。東大寺の念佛堂、高野山の新別所等これなり。」(第四十五卷)更に『高野春秋』(第七卷)を見るに、熊谷入道蓮生房が前後十四年間に留まり、二十四人の社友と共に念佛生活を送つたといふことが出てゐる。東大寺の大佛再建で名高い俊乗房重源も亦この新別所の社友の一人であつた。むしろ十分に調べ上げた上でないに、はつきりしたことは云へないが、わが祖法然上人もその頃高野御登嶺のこゝがあつたのではないかと考へられる。これはさも角、法然上人の御念佛がこの頃高野の奥まで這入り込んでゐたといふことは確かな話である。

こんな具合で、法然上人の頃には随分念佛行者が高野入りをしてゐる。明遍僧都も亦その一人である。奥之院御廟の橋のほり、水向所の側に明遍杉といふのがある。根元には明遍上人の石像を祀つてゐる。明遍上人は少納言通憲の子であつて、三論の奥旨を極め、世に才名を謳はれてゐたけれども、深く名利を厭ひ、遂に高野山に隠れた人で、蓮花三昧院の開基である。

ところが、この明遍上人は、機縁が熟したといふのか、ふさしたこゝからすつかり法然上人に歸向して熱心な念佛信者となつてしまつた。『法然上人行狀畫圖』(第十六卷)を披くに、法然上人が亡くなつた後にはその遺骨を一期の間頭にかけて、のちには高野の大將法印貞曉(録倉右大臣の子息)に相傳へられたとある。こゝで、『高野春秋』第七、建曆二年のこゝろを披くに、

「この年十月(正月の誤)廿五日、淨土宗開祖法然上人遷化せらる。未資等五輪の石塔を奥之院に創立す。熊谷入道蓮性(生の誤)の石塔亦之を建つ。未だその施主を考へず。」

とある。そして『高野春秋』の筆者懷英大和尚は「法然上人の御廟はその當時新別所にゐた法然上人の弟子たちが相寄つて師恩報謝のために之を立てたのであらう」と書き添えてゐる。私は未熟な研究の結果も亦この懷英大和尚の論斷を無條件に承認するこゝの出来るのを喜んでゐる。折角、高野の山奥に法然上人の石塔を建てるぐらゐるだから、無論塔下には上人の御骨を納め奉つたこゝを考へられる。又明遍上人が一期の間頸にかけてゐたこゝいふ法然上人の御骨が高野の大將法印貞曉に相傳へられたこゝいふ話もあるのだから、必ずやこの御骨も五輪の塔下に納められたものゝ信じてよい。

右のやうな次第で、高野の山奥に圓光大師の御廟のあるこゝは、不思議であつて不思議でない。御廟のありかは奥之院への參詣道、中の橋も通りすぎて頌徳殿こゝいふ建物にさしかゝる約半町ほゞ手前、參詣道の左側にある。今日では高野山熊谷寺(持寶院こゝいふ)の所轄になつてゐる。